

2013

東アジア学会第 23 回大会

プログラム・報告要旨集

開催日：2013年10月12日（土）

会 場：九州大学・西新プラザ

東アジア学会第 23 回大会

— 交流 / 模索する東アジア —

大会プログラム ・ 報告要旨集

日時: 2013 年 10 月 12 日(土) 10:00~17:30(受付 9:30~)

会場: 九州大学・西新プラザ 2F 大会議室

(〒814-0002 福岡市早良区西新 2-16-23)

懇親会: 18:00~20:00

午前の部（10:00～13:00）(2F 大会議室)

司会：波瀾剛（九州大学大学院比較社会文化研究院准教授）

■ 自由論題研究報告

◇第一部：座長：安達義弘（福岡国際大学学長）

・第1報告（10:00～10:40）

「日本と台湾の小学校学習指導要領における道德教育的要素の比較」

報告者：荒木雪葉（西南学院大学非常勤講師、西九州大学非常勤講師）

・第2報告（10:40～11:20）

「東アジア中日韓三国における無形文化遺産保護の現状と課題に関する一考察」

報告者：白松強（九州大学大学院人間環境学府博士後期課程）

◇第二部：座長：木幡伸二（福岡大学商学部教授）

・第1報告（11:30～12:10）

「台湾海峡兩岸問題と台湾經濟の将来」

報告者：松下愛（久留米大学大学院比較文化研究科博士後期課程）

・第2報告（12:10～12:50）

「九州のアジア戦略」

報告者：加峯隆義（九州經濟調査協会 総務部次長）

昼食（13:00～14:30）

会場内には食堂はありませんので、近隣のレストラン等をご利用ください

午後の部（14:30～17:30）(2F 大会議室)

司会： 総田芳憲（北九州市立大学外国語学部准教授）

■ 開会あいさつ

徳島千穎（東アジア学会会長/（株）トクスイコーポレーション代表取締役会長）

◇シンポジウム

「東アジアの文化交流—釜山・大分・福岡における映画祭の現場から—」

座長： 波瀾剛（九州大学大学院比較社会文化研究院准教授）

・基調講演（14:40～15:30）

「映画祭を通じた文化交流の意味と成果」（韓国語、通訳あり）

講演者： キム・イソク（Made in Busan 独立映画祭前執行委員長）

・第1報告（15:40～16:05）

「日韓相互認識における「3次元」映画交流の意義—大分での実践から—」

報告者： 下川正晴（日韓次世代映画祭ディレクター）

・第2報告（16:05～16:30）

「ゼロ年代の『フィルムアンデパンダン』—福岡と釜山の映画実践—」

報告者： 西谷郁（福岡インディペンデント映画祭実行委員会 Chairman）

・討論・質疑応答（16:40～17:20）

■ 閉会あいさつ

波瀾剛（九州大学大学院比較社会文化研究院准教授）

懇親会（18:00～20:00）

会場： 式番館じゃがいも

福岡市早良区西新 3-12-7

(092)822-6222

《目 次》

■ 自由論題研究報告

- 1)「日本と台湾の小学校学習指導要領における道德教育的要素の比較」
報告者:荒木雪葉(西南学院大学非常勤講師、西九州大学非常勤講師) (06)
- 2)「東アジア中日韓三国における無形文化遺産保護の現状と課題に関する一考察」
報告者:白松強(九州大学大学院人間環境学府博士後期課程) (08)
- 3)「台湾海峡兩岸問題と台湾經濟の将来」
報告者:松下愛(久留米大学大学院比較文化研究科博士後期課程) (10)
- 4)「九州のアジア戦略」
報告者:加峯隆義(九州經濟調査協会 総務部次長) (11)

◇ シンポジウム

「東アジアの文化交流—釜山・大分・福岡における映画祭の現場から—」

- 5)「映画祭を通じた文化交流の意味と成果」
講演者:キム・イソク(Made in Busan 独立映画祭前執行委員長) (13)
- 6)「日韓相互認識における「3次元」映画交流の意義—大分での実践から」
報告者:下川正晴(日韓次世代映画祭ディレクター) (17)
- 7)「ゼロ年代の『フィルムアンデパンダン』—福岡と釜山の映画実践」
報告者:西谷郁(福岡インディペンデント映画祭実行委員会 Chairman) (19)

【自由論題研究報告】

報告要旨

1) 日本と台湾の小学校学習指導要領における道徳教育的要素の比較

荒木 雪葉（西南学院大学非常勤講師、西九州大学非常勤講師）

本発表は、日本と台湾の学習指導要領それぞれの特徴を比較して、日本の学習指導要領には道徳教育的要素があまり見られないことを指摘し、今後の日本の教育において道徳教育を導入する場合の可能性の一端について考察するものである。

日本の小学校学習指導要領「国語」(以下「国語学習指導要領」と表記)では、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」ということを目標としている。台湾では日本の小中学校九年間にあたる義務教育期間を九年一貫教育としている。そこで日本の中学校の学習指導要領「国語」も参照すると、小学校と同じ目標が掲げられていた。

一方台湾の国民中小学九年一貫課程綱要「国語文」(以下「国語文課程綱要」と表記)では、基本理念として「1. 学生の自国の言語文字の正確な理解と素早い応用能力を養う。学生に聴く・話す・読む・書く・作るなどのすぐれた基本的能力を身につけさせ、また言語文字を使用して気持ちを伝達し、性情を陶冶し、知恵を啓発し、問題を解決できるようにする。

2. 学生が効果的に国語文を応用して思考・理解・推理・協調・討論・鑑賞・創作に携われるように養い、生活経験に溶け込み、多元的視野を広げ、国際的思潮に向き合うことができるようにする。

3. 学生に多方面にわたる読書の興味を起こさせ、文学作品を鑑賞する能力を引き上げ、我が国の文化の精髓を深く認識させる。

4. 学生の学習における工具書の利用を案内し、情報ネットワークを結合させ、それによって言語学習をより広く深くし、学生が自分で学習する能力を養う」(荒木訳)を掲げている。

目標あるいは基本理念を比較するだけでも、既に学習内容の違いが際立っている。すなわち日本では日本語という言語に関する能力を学習することに特化しているのに対し、台湾では国語を通して「性情を陶冶」「多元的視野を広げ国際的思潮に向き合う」「文化の精髓を深く認識」などの、人格的教育や言語に限らない文化的教育を行うことを目標としている。

以上のように、本発表では、日本と台湾の学習指導要領を比較し、それぞれの特徴を明らかにして、今後の日本の教育における道德教育の可能性を考察する上での手掛かりの一端を提示する。

2) 東アジア中日韓三国における無形文化遺産保護の現状と課題に関する一考察

白 松強（九州大学大学院人間環境学府博士後期課程）

周知のように、19世紀はヨーロッパの世紀だった。20世紀は、アメリカの世紀。そして21世紀はアジアの世紀になる、と述べているそうである。21世紀アジアの時代と言われる。その中で中日韓三国がことさらに注目されている理由を二つまとめてみよう。

経済面から見れば、2012年度の国内総生産(GDP)は、中日韓三国は世界では第2位・第3位・第15位を占めることとなった。勿論、アジアでは、第1位・第2位・第3位を占めることも確実となったそうである。文化の面から見れば、2012年、ユネスコ無形文化遺産保護条約「代表一覧表」への記載項目は、中日韓三国もそれぞれ(36件・21件・15件)世界の1位、2位、3位を占めているとなった。社会の政治・文化などの上部構造は経済という下部構造に既定され、それによって変化し、同時に「下部構造」に反作用すると、マルクスは史的唯物論を理論的に生き生きと説明した。つまり、文化は、政治・経済・社会の姿を反映する鏡である。このような視角から見れば、中日韓三国は、自国の歴史や伝統、文化を代表する物件をユネスコ無形文化遺産登録に必死になっているのはおかしくないことは理解できる。世界に誇る優秀な伝統文化を大切に守り伝えるという理念や行動は、それ自体、悪いものではない。

しかしながら、国家行政の恣意的な認定された民俗文化村と、歴史的起源のはっきりしない習俗や信仰をサルベージするということの横行、無形文化遺産の登録に伴う過度の商業化や中身のない伝統文化的レプリカ保存など、これらのさまざまな現象は、一括してそう評価し、すべてを是としてしまうことは危険である。国家の認定より、ユネスコの認定されたものの方が価値がより高いといった、保護ではなく権威づけのシステムに、現在の民俗文化財は陥っているのではないか。結局、始めの優品主義的「国定イデオロギー」から、特にこの後数十年間、「国益至上主義」へと更に拡大発展していった。「伝統文化を保護、民族文化を発掘」という文化ナショナルリズムを出発点として、東アジアにある中日韓三国は、各国の文化政策を踏まえて、伝統的な文化を復興するという看板を掲げて、無形文化遺産保護の面で、ねじ曲がった道に突き進んで、世界で最大の「文化拡張競争」の場となっている。

そこで、ユネスコ無形文化遺産保護条約の成立に向け、日韓は指導的な役割を果た

していることを解明する上で、さらには、今日まで放置され続けている変容された民俗文化財を無形文化遺産にさせる裏ワザ、即ち民俗文化財を操る国家の政治権力・文化権力に提起したが、その裏に潜む民俗文化財を国家のシンボルにさせる支配動因—文化ナショナリズム—「文化拡張競争」についても究明することを目的とする。

3) 「台湾海峡兩岸問題と台湾經濟の将来」

松下 愛 (久留米大学大学院比較文化研究科博士後期課程)

台湾が李登輝総統(1988-2000年)のもとで民主化してすでに25年がたっている。また、中国經濟が鄧小平のもとで開放政策(1978年)から既に35年が過ぎている。この間の台湾と中国との兩岸関係については、日本から中国への投資や台湾から中国への投資(資本移動)についても重要な時期としての研究が必要である。

また、最近では、台湾の国民党総裁の馬英九政権誕生(2008年～)以来、実現されている兩岸政策によって、大陸と台湾との經濟交流が進展している。具体的には、兩岸經濟間の人やモノ・カネの交流が進展している。さらには、大陸から台湾への投資(資本移動)も進んでいる。

このような歴史的な経過について、資料分析や現地調査に基づいて調査・研究を行い、中国經濟と台湾經濟のそれぞれの經濟についての将来の可能性と交流の進展の可能性について分析する。

中国と台湾の両国の産業構造や貿易構造、そして、インフラ建設について調査・分析して、今後の両国の經濟の在り方について考察する。

考察する際の經濟理論としては、フェイ＝ラニスの「労働余剰經濟における經濟發展モデル」と「ロストウの發展段階説」を基礎としてより現実的な經濟問題を加味しながら、オリジナルの修正モデルを構築していく計画である。また、巨大な中国については、当面は、東側の海岸域の經濟状態についての研究を重点的に行う予定である。

また、この兩岸関係の進展と日本經濟や東南アジア經濟との関係について、現代のみならず、将来展望との関係についても、ヒト・モノ・カネの3つの側面について分析する予定である。

4) 「九州のアジア戦略」

加峯 隆義（九州経済調査協会 総務部次長）

九州の潜在成長率は近年上昇している。その理由の1つは、アジアから受ける活力が九州経済の成長を押し上げていると推測できる。外国クルーズ船はもとより、日本の原風景を求めて九州を訪れるアジア人は増えている。製造業は、九州に拠点を設ける動きを加速している。これらの企業は、リスク分散に加えて、アジアとの取引を念頭に置いた動きである。

一方、九州企業のアジア進出も多様性に富む動きがみられる。そこには3つの多様化が進んでいるといえよう。1つは進出先の多様化である。中国一辺倒だったアジア進出は、2000年代以降、他国に分散を始めている。特に印、越への進出が目立つ。2つには業種の多様化である。対個人向け小売・サービス業、すなわちBtoCの企業進出が増加している。外食産業はもちろん、学校、住宅販売、リラクゼーション・スパ、ペット用品販売など、アジアでの中間層の増加に伴い、進出業種も一層多様化している。3つは、企業規模の多様化である。今や進出企業のボリュームゾーンは中小・零細企業である。このように、アジア進出は、すべての企業に可能性があり、オール参加型となっている。

ところでアジア進出した企業は、本社への影響についてどう評価しているのか？6割以上の企業はアジア進出をプラスと捉えている。さらに製造業の進出であっても、国内事業所の従業員の減少は限定的である。しかしながら利益を国内に還流できているかという点を決してそうではない。そこには、様々な障壁があるようだ。

このように、企業のアジア進出は国内にもプラスの影響を与えているが、地銀、経済団体、土業などでは企業を支える支援網の拡充が進んでいる。今後九州は、企業の海外進出をより一層盛り上げていかなければならない。その1つの手段として、海外に広がる和僑ネットワークを活用することが考えられよう。またアジアにいわゆるKYUSHU産業団地を設けて、九州に利益をリターンすることで、九州が所得収支でいきっていくことも考えなければならない。さらに、チャイナリスクの高まりを受けて、チャイナプラスワンのワンは東南アジアだけでなく九州もその候補として考えて良いだろう。実際に中国から九州・沖縄に機能を戻す事例も生まれている。

【シンポジウム】

東アジアの文化交流

—釜山・大分・福岡における映画祭の現場から—

報告要旨

5) 「映画祭を通じた文化交流の意味と成果」

キム・イソク（メイドイン釜山独立映画祭前執行委員長）

フランスの哲学者ジャン・リュック＝ナンシーは今日人類が危機に瀕している原因を他者を認めようとしないう神論的価値観に求めている。彼によると、現在の世界は「一種の狂信的状態」に陥っている。だとすれば、このような危機的状況においてどのように他者と意思疎通し共存することが可能なのか？

文化、または映画を通じた他者の理解

初期の映画人たちは映画が「視覚的エスペラント語」になり得ると考えていた。今日の映画は彼らの期待とは異なる様相を示している。しかし、依然として映画は人類の対話と共存に寄与することができる潜在力を持っている。なぜなら、映画を見ることは他人の生涯を凝視することであり、他人の話に耳を傾ける行為であり、このような過程を通して人間は他人に対する理解へと至るためだ。

新しい関係の構築：韓日映画交流の進行過程と成果

映画祭は多様な世界、多様な人間、多様な価値と出会う機会を提供する。釜山の事例を見てみよう。現在釜山は映画（祭）の都市として知られている。しかし以前の釜山はソウルから遠く離れた辺境の都市に過ぎなかった。その頃の釜山は常にソウルだけを見ていたが、映画祭を契機にして、アジアとの関係模索する新しい視点を持つようになった。

また、映画祭は新しい共同体の形成を促す。この5年間に釜山と福岡の映画人たちは福岡インディペンデント映画祭とメイドイン釜山映画祭を通して交流してきた。また、大分では韓国と日本の若い映画人たちが一つの場所に集う機会を持つようになった。このようにして形成された関係はお互いに対する認識を変え、さらには自分自身を変化させる契機となる。現在の釜山の独立映画に関わる人々にとって、福岡と大分は他のどの都市よりも親しい名前となった。

映画交流の目指す場所：中心のない映画祭

ジャン＝コクトーによれば、映画祭は誰も定住することのない“*No man's land*”だ。した

がって、映画祭は特定の国家や特定の都市に属することがない。また、映画祭の本質的価値は交流と対話にある。その交流と対話の主体は作品であり人々である。作品と人々がひととき集い、密度の濃い時間を過ごして、また去って行く。映画祭は交流の中心ではあるが、その中心はいつも空いたままだ。

脱中心的な映画祭はひとつの実体ではなく、映画祭を通して形成される共同体であり、無定型の関係で結ばれている。ところが多い映画祭は少しずつ巨大な実体へと変化を遂げ、本質が損なわれている。映画祭が「自然的な平等と対話の場所」になるように、特権的な場所を作らないようにするのが、われわれの課題である。

영화제를 통한 문화교류의 의미와 성과

프랑스의 철학자 장-뤽 낭시는 오늘날 인류가 맞이한 위기의 원인을 타자를 인정하지 않는 일신론적 가치관에서 찾고 있다. 그에 따르면 현재 세상은 ‘일종의 광신적 상태’에 빠져 있다. 그렇다면 이런 위태로운 세상에서 어떻게 타자와 소통하고 공존할 수 있을까?

문화 혹은 영화를 통한 소통

초기 영화인들은 영화가 ‘시각적 에스페란토어’가 될 수 있을 것이라 생각하였다. 오늘날의 영화는 그들의 기대와는 다른 모습이다. 하지만 여전히 영화는 인류의 소통과 화합에 기여할 수 있는 잠재력을 가지고 있다. 영화를 본다는 것은 타인의 삶을 응시하는 것이며 타인의 이야기에 귀를 기울이는 행위이며, 이런 과정을 통해 인간들은 타인에 대한 이해에 도달할 수 있기 때문이다.

새로운 관계의 형성 : 한일 영화교류의 진행과정과 성과

영화제는 다양한 세상, 다양한 인간, 다양한 가치를 만날 수 있는 기회를 제공한다. 부산의 사례를 살펴보자. 현재 부산은 영화(제)의 도시로 알려져 있다. 하지만 얼마 전까지만 해도 부산은 서울에서 멀리 떨어진 변방의 도시에 불과했다. 그때 부산은 늘 서울만 바라보고 있었다. 영화제를 계기로 부산은 아시아와 세계를 바라보는 새로운 시각을 가지게 되었다.

또한 영화제는 새로운 공동체를 형성하게 해준다. 지난 5년간 부산과 후쿠오카의 영화인들은 후쿠오카독립영화제와 메이드인부산독립영화제를 통해 교류하였다. 또 오이타에서는 한국과 일본의 젊은 영화인들이 한 자리에 모이는 기회를 가졌다. 이렇게 형성된 관계는 서로에 대한 인식을 바꾸었으며, 더 나아가 자기 자신을 변화시키는 계기를 제공하였다. 이제 부산의 독립영화인들에게 후쿠오카, 오이타는 어느 도시보다도 가까운 이름이 되었다.

영화교류의 지향점 : 빈 중심으로서 영화제

장 콕토에 따르면 영화제는 누구도 정주하지 않는 “No man’s land”다. 따라서 영화제는 특정 국가나 특정 도시에 속할 수 없다. 또한 영화제의 본질적

가치는 교류와 소통에 있다. 그 교류와 소통의 주체는 작품과 사람들이다. 작품과 사람들은 잠시 모여서 뜨겁게 해후하고 다시 떠난다. 따라서 영화제는 교류의 중심이지만 그 중심은 늘 비어있을 수밖에 없다.

빈 중심으로서 영화제는 하나의 실체가 아니며, 영화제를 통해 형성되는 공동체 역시 무형적인 관계로 구성되어 있다. 그런데 많은 영화제들이 점점 거대한 실체로 변해가면서 본질이 훼손되고 있다. 영화제가 “자연적인 평등과 소통의 장소”가 될 수 있도록 빈 중심을 지키는 것이 우리에게 남은 숙제다.

김이석 (金珥錫, Kim Yi-seok)

東義大學校 映畫學科 教授、釜山映畫學科教授協議會 會長

前 釜山獨立映畫協會 會長、前 Made in Busan 獨立映畫祭 執行委員長

6) 「日韓相互認識における「3次元」映画交流の意義～大分での実践から」

下川 正晴（日韓次世代映画祭ディレクター）

日韓サッカーにおける「歴史横断幕」騒動など、「日韓文化摩擦」が継続する中で、映画を通じた日韓文化交流はどのような意義を見いだせるのだろうか？毎日新聞ソウル特派員（のち論説委員）の経験から日韓相互認識のギャップを痛感した筆者は、大分の県立短大に赴任後(1)隣国認識の契機としての韓国映画紹介(2)日韓次世代映画祭の開催(3)日韓学生短編映画制作交流、という「3次元」の映画交流を通じて、若者世代の日韓相互認識の深化を促して来た。(1)の具体的成果は、植民地時代の「親日映画」の紹介事業に代表される。(2)の映画祭は別府市での開催が来年春には第6回目を迎える。(3)で制作された日韓合作の短編映画は「アジアナ国際短編映画祭」で特別上映されたほか、韓国政府主催の「スマートフォン映画祭」で金賞を受賞するなどの成果を生んだ。九州の片隅で進む日韓映画交流の「試行」は、どこに向かうのだろうか？

한일 상호인식의 '3 차원'영화교류의 의의~~오이타에서의 실천으로부터

시모카와 마사하루(한일차세대영화제디렉터)

한일축구시합장의 '역사플래카드'소동 등 '한일문화마찰'이 연속 발생하는 가운데 영화를 통한 한일문화교류는 어떤 의의를 찾아낼 수 있을까? 매일신문 서울특파원(후에 논설위원)경험이 있는 필자는 오이타의 현립단대에 부임한 후, (1)한국영화의 소개 (2)한일차세대영화제의 개최 (3)한일학생 단편영화제작교류라는 '3 차원' 영화교류를 통해 젊은 세대의 한일 상호인식의 심화를 촉구해 왔다. (1)에서의 구체적인 성과는 식민지 시대의 '친일영화' 소개사업으로 대표된다. (2)의 영화제는 벳부시에서의 개최가 내년봄에 6 회째를 맞이한다. (3)에서 제작된 한일합작단편영화는 '아시아나국제단편영화제'에서 특별상영된 것 외에 한국정부 주최의 '스마트폰영화제'에서 금상을 수상하는 등의 성과를 냈다.

7) 「ゼロ年代の『フィルムアンデパンダン』 ～福岡と釜山の映画実践～」

西谷 郁（福岡インディペンデント映画祭実行委員会 Chairman）

はじめに

釜山や福岡は、世界において、映画の盛んな都市として認知されており、その活動も積極的である。では今後、釜山と福岡はどのように映画の実践をおこなえばいいのか？ゼロ年代の技術的・社会的特徴をとらえながら、「フィルムアンデパンダン」という思想と実践的活動をふまえ、釜山と福岡のこれからの映画実践の在り方を提言したい。

概要説明

釜山はアジアを代表する映画都市として「ゼロ年代」以降、急速に発展を遂げている。世界の映画界は、釜山に限らず映画祭を中心に産業の発展を図ろうとしている。そこには商業的利益を追求するベクトルが非常に強い。

そもそも「映画祭」とは、1930年代以降の戦間期、ハリウッドの映画産業に対抗する映画の可能性を模索する思想と運動として誕生し、ヴェネチア・カンヌ・ベルリンの三大映画祭を軸に発展を遂げた。第二次世界大戦直後の1950年代から1980年代にかけてアートシーンを中心に「アンデパンダン」運動がヨーロッパや日本を中心に展開された。「アンデパンダン」とは、産業や営利目的を最優先するのではなく、「無審査、自由出品、全作品の出品」を追求する思想と活動である。1960年代、日本の「独立プロ」は最たる活動の一つである。

1970年代以降には、大林宣彦らを中心に「フィルムアンデパンダン」が積極的に展開され、九州派や松本俊夫、伊藤高志、石井聰互らの福岡の実験映画が全国から脚光を浴びた。

一方、韓国は1980年代に民主化運動のさなか「小さな映画」運動がおき、「三八六世代」の登場を見るも、ハリウッドの産業振興に対抗するため、スクリーンクォーター制に専心せざるを得なかった。その結果、独立映画運動における「フィルムアンデパンダン」は積極的に発展しなかった。

1990年代になると、ハリウッドの「ソフトパワー」や「IT革命」をへて、映画の多様化は劇的に変化した。斜陽であった映画産業は、デジタル技術やIT社会を援用し、メディア産業へと転換することで、再び巨大な市場を築きあげようとしている。

爆発的なソフトとハードを備えたゼロ年代において、今後、東京でもソウルでもハリウッドでもない、福岡と釜山、別府、九州などの「地方」は映画で何をすればいいのか？

提言(1) 営利目的のみを追求しない。個々人の表現活動を大切に「アンデパンダン」の思想を実践する。

＝毎日の日常生活に密着した表現活動としての映画実践。

提言(2) 東京やソウルなど主要都市の基準や市場原理にのっとるだけでなく、「地産地消」の映画製作現場と市場といった、新たな「映画エリア」の構築を目指す。

＝映画人の交流にとどまらず、釜山や福岡を日常的に行き来する、アテンダントや作品の字幕、翻訳、制作スタッフが育成を教育の重点課題にすること。

提言(3) 一過性ではなく、中長期的な企画・計画が必要。

＝流動性が大きく、経済的に不安定な「産・官」だけではなく、「学」を中心に企画立案する。

＝「学」を中心とすることで、常に新たな人材がプロジェクトに参加し新たな企画立案作業が進展し持続の可能性も高まる。

具体案: キム・ジゴン監督の「Granma」プロジェクト

具体案: 西谷郁監督の「福岡と釜山の熱狂的な野球ファン」プロジェクト

→ ドキュメンタリーからスタートし、調査取材を蓄積したうえで、ドラマ制作を目指す。

おわりにかえて ～問題点と克服点～

- ・人材不足や資金不足を言い訳にしないこと。
- ・ボランティア精神と、「アンデパンダン」の違いをしっかりと議論し相互理解を深めること。
- ・特定のアテンダントやキーパーソンに過重な負担をかけないこと。

ひいては、オーバー・コミュニケーション(過剰交流)を避けるよう、チームごとの協議制を積極的に導入すること。

福岡と釜山の一人の個々人が「フィルムアンデパンダン」の映画実践をマネジメントするためには、ドラッカーのいう「非営利組織の経営」を目指すことこそが、ゼロ年代を迎

えた今、求められていることではないか。

제로 연대의 '필름 앵데팡당' ~후쿠오카와 부산의 영화실천~

니시타니 가오루(후쿠오카 독립영화제 실행위원회 위원장)

들어가며

부산과 후쿠오카는 세계에서 영화가 번창한 도시로서 인식되고 있고 그 활동도 적극적이다. 그럼 금후 부산과 후쿠오카는 어떻게 영화실천을 이행하면 좋을까? 제로 연대의 기술적 사회정기특징을 파악하면서 '필름 앵데팡당'이라는 사상과 실천적 활동을 바탕으로 부산과 후쿠오카의 앞으로의 올바른 영화실천의 모습을 제안하고자 한다.

개요설명

부산은 아시아를 대표하는 영화도시로서 '제로 연대'이후, 급속하게 발전하고 있다. 세계의 영화계는 부산뿐만 아니라 영화제를 중심으로 산업의 발전을 꾀하고 있다. 거기에는 상업적 이익을 추구하는 측면이 상당히 강하다.

본래 영화제는 1930년대 이후의 전간기(戰間期), 할리우드의 영화산업에 대항하는 영화의 가능성을 모색하는 사상과 운동으로서 탄생해, 베니스·칸·베를린 삼대영화제를 축으로 발전했다. 제 2차세계대전 직후의 1950년대부터 1980년대에 걸쳐 아트신을 중심으로 '앵데팡당'운동이 유럽과 일본을 중심으로 전개되었다. '앵데팡당'이라는 것은 산업과 영리목적은 최우선으로 하는 것이 아니고, '무심사, 자유출품, 전작품의 출품'을 추구하는 사상과 활동이다. 1960년대 일본의 '독립프로'는 주된 활동의 하나였다.

1970년대 이후에는 오바야시 노부히코를 중심으로 '필름 앵데팡당'이 적극적으로 전개되어 규슈파와 마쓰모토 도시오, 이토 다카시, 이시이 소고의 후쿠오카 실험영화가 전국적으로 각광을 받았다.

한편, 한국은 1980년대에 민주화운동이 한창인 때 '작은 영화'운동이 일어나 '386세대'의 등장을 보지만, 할리우드의 산업진흥에 대항하기 위해 스크린쿼터제에 전념하지 않을 수 없었다. 그 결과 독립영화운동의 '필름 앵데팡당'은 적극적으로 발전하지 않았다.

1990년대가 되면 할리우드의 '소프트파워'와 'IT 혁명'을 거쳐 영화의

다양화는 극적으로 변화했다. 사양길에 접어들었던 영화산업은 디지털기술과 IT사회를 주장하며 미디어산업으로 전환하여 다시 거대한 시장을 구축하려고 하고 있다.

폭발적인 소프트와 하드웨어를 갖춘 제로 연대에게 금후 동경도 서울도 할리우드도 아닌 후쿠오카와 부산, 벅부, 규슈 등의 '지방'은 영화로 무엇을 하면 좋을까?

제안(1)영리목적만을 추구하지 않는다. 개개인의 표현활동을 소중히 하는 '앵데팡당'사상을 실천한다.=매일의 일상생활에 밀착한 표현활동으로서의 영화실천.

제안(2)동경과 서울 등의 주요도시의 기준과 시장원리에 따를 뿐만 아니라, '지산지소(地產地消)'의 영화제작현장과 시장의 새로운 '영화 에어리어'의 구축을 목표로 한다.

=영화인의 교류에 그치지 않고 부산과 후쿠오카를 일상적으로 왕래하는 앵데팡당과 작품의 자막, 번역, 제작스태프의 육성을 교육의 중요과제로 할 것.

제안(3)일과성이 아닌 중장기적인 기획·계획이 필요.

=유동성이 크고 경제적으로 불안정한 '산(産)·관(官)'뿐만 아니라, '학(學)'을 중심으로 기획입안을 한다.

= '학(學)'을 중심으로 하면 항상 새로운 인재가 프로젝트에 참가하고 새로운 기획입안작업이 진전하여 지속의 가능성도 높아진다.

구체안: 김지곤 감독의 '할매'프로젝트

구체안: 니시타니 가오루 감독의 '후쿠오카와 부산의 열광적인 야구팬' 프로젝트

→ 다큐멘터리를 시작으로 조사취재를 축적한 후에 드라마제작을 목표로 한다.

나오는 말을 대신하며 ~문제점과 극복점~

·인재부족과 자금부족을 핑계로 하지 않을 것.

·볼런터리정신과 '앵데팡당'의 차이점을 확실히 의논하고 상호이해를 깊게할 것.

·특정 안내인과 주요 인물에게 과중한 부담을 주지 않을 것.

나아가서는 과잉교류를 피하도록 팀별 협의제를 적극적으로 도입할 것.

후쿠오카와 부산의 한 개개인이 '필름 앵데팡당' 영화실천을 관리하기 위해서는 드러커가 말하는 '비영리조직의 운영'을 지향하는 것이야말로 제로 연대를 맞이한 지금 요구되고 있는 것은 아닐까.

メモ

A large, empty rectangular box with a thin black border, occupying most of the page below the 'メモ' header. It is intended for writing notes.

メモ

A large, empty rectangular box with a thin black border, occupying most of the page below the 'メモ' header. It is intended for handwritten notes.